

第54回全日本実業団剣道大会

主催 日本武道館
共催 日本実業団剣道連盟



第54回全日本実業団 剣道大会

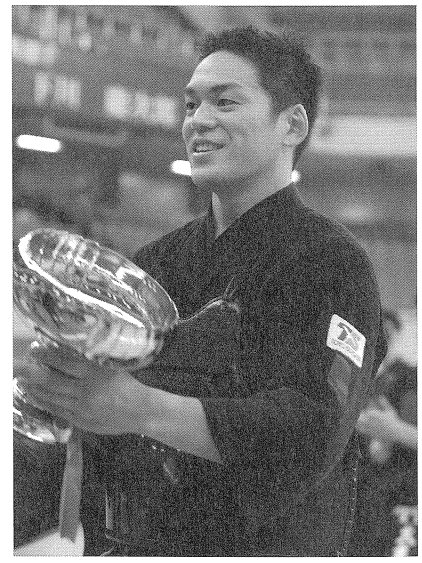
平成23年9月19日(祝)
日本武道館
主催 ◆ 全日本実業団剣道連盟
撮影 ◆ 窪田正仁

優勝 ◆ 東洋水産(本社)

選手=庄司祐也、石川康宏、青木宏介、久木原裕二、下川慶次郎、森山英司。監督=森久清文

勝負の年に 東洋水産(本社)が 日本一奪取!

東日本大震災の被害にも挫けることなく、民間企業に勤務する剣道愛好者たちが今年も日本武道館に集った。306チームがしのぎを削った大会は昨年、一昨年と3位入賞を果たしている東洋水産(本社)の優勝に終わった。並々ならぬ意気込みで戦いに臨んだ同社、大会史上3度目の栄冠であった。



最優秀選手 ◆ 下川慶次郎
四段・27歳(東洋水産・本社)

最優秀選手には大将の下川が選出された。この日は大将戦、代表戦など幾多の接戦を粘り強さで切り抜けた

決勝戦を終えた後、東洋水産(本社)のメンバーをはじめ、関係者一同の目に浮かんだのは涙。関東大会、そしてこの全日本大会とつねに上位を賑わす存在であった東洋水産ではあるが、頂点への厚い壁には幾度も阻まれ続けた。この全日本大会での歴史を振り返れば、初優勝は第26回大会(昭和58年)のこと。その後、第27回、28回大会でもベスト4進出を果たし、第29回大会で2度目の優勝を迎える(この時は品川チームが優勝、本社チームは3位)。一昨年、昨年もまた3位にまでコマを進めるものの惜敗、もう一歩がなかなか越えられずにいた。今回、同社にとって3度目となる日本一を達成したわけだが、前回の優勝は26年前の昭和61年にまでさかのぼる。積年の思いが涙となって表われるのは当然のことといえよう。本社チームの監督を務めた森久清文氏もまた目に涙をにじませつつ、喜びを

【写真】▲惜つこすとした。
—のコテに中澤がコテメンを合わせる—
—が、神崎は再び機会を探ると大き—
—両者がメンに。高橋の二本目が有終—
—の美を飾った(82ページの写真)。

準々決勝
【代表】勝利（パナソニック電気・本社）メー 中石（日本通運・本社）
 ▶大将戦を引き分けに終え勝負は代表戦へともつれた決戦に臨むのは大将同士。勝利がいきなりのコテに出れば中石もこれを受けさまにメン。両者の気迫がぶつかり合う。試合時間も3分に差し掛かろうという時、勝利がメーに跳べばこれが見事な一本となる（写真）



チーム	順	先	次	中	副	大	得点	代
パナソニック電気 (本社)	メー	大 龍	植 田	滝 崎	吉 井	勝 見	1	勝 見
	メー	×	×	×	×	×	2	メー
日本通運 (本社)	メー	×	×	×	×	×	2	中 石
	メー	×	×	×	×	×	1	中 石



準決勝
【副将】久木原（東洋水産・本社）メーメ 吉井（パナソニック電気・本社）
 ▲五分のスコアで迎えた副将戦。ひきメンで先制したのは久木原だったが、吉井も連覇への執念を見せてメンで一本返す。勝負となるや捨て切ったのは久木原。迷いのないメンに跳べばこれが吉井をとらえた（写真）。チーム最年長の久木原が意地を見せ大きな一勝を奪う

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
東洋水産 (本社)	メー	庄 司	石 川	青 木	久 木	下 川	2
	メー	×	×	×	×	×	3
パナソニック電気 (本社)	メー	×	×	×	×	×	2
	メー	×	×	×	×	×	1

準々決勝
【代表】下川（東洋水産・本社）メー 橋本（伊田テクノス・本社）
 ▶実力者同士の代表戦は24分を超える熱戦となった。両者惜しい技は繰り返すがやや浅い、あるいは体が前に出ない等の要素でなかなか旗を上げるには至らず。消耗戦となった試合は、橋本が浅くコテを仕掛けたところ、下川が放った抜き気味のメンで決した（写真）



チーム	順	先	次	中	副	大	得点	代
東洋水産 (本社)	メー	庄 司	石 川	青 木	久 木	下 川	2	下 川
	メー	×	×	×	×	×	3	メー
伊田テクノス (本社)	メー	×	×	×	×	×	3	橋 本
	メー	×	×	×	×	×	2	橋 本



準々決勝
【副将】只野（日通商事・本社）メー 佐伯（東芝テック）
 ▲日通商事の次鋒・諸江の一本勝ちを追う東芝テック。副将戦で何とかポイントを奪いたかったところだったが、コテで先制したのは日通商事・只野だった。その後の佐伯の猛攻にも目を見張るものがあったが只野が殊勲の一本を守り切り、日通商事が勝利を決めた（写真は両者の攻防）

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
日通商事 (本社)	メー	中 野	諸 江	大 野	只 野	丸 山	0
	メー	×	×	×	×	×	4
東芝テック	メー	×	×	×	×	×	0
	メー	×	×	×	×	×	0

準決勝、東洋水産との戦いも大黒柱の勝利に勝負がかかったが、こちらも大会会屈指の大将・下川を相手に追う立場と

ヤマ場を乗り越えた。
 準決勝、東洋水産との戦いも大黒柱の勝利に勝負がかかったが、こちらも大会会屈指の大将・下川を相手に追う立場と

たのだと思います」
 大会の準々決勝、準決勝などはいずれも先制を許してからの逆転劇になるが、どちらも中堅の青木、そして副将の久木原の活躍あつてのもの。久木原の執念がチームを決勝へ導いた結果といえよう。そして、今大会に賭ける思いのふたつめは、森久監督の肩に見える喪章に理由があつた。
 「東日本大震災で亡くなられた方々を悼む意味と、弊社の創業者であり相談役であつた森和夫が7月に逝去したこともあり喪章を着けて臨みました。森は剣道部への理解もたいへん厚かつたこともあり、今回はチーム一丸、今年こそは、という思いで戦いました」
 きつと天国で喜んでくれていると思います、と森久監督は最後は笑顔で締めくくった。



先鋒、次鋒の連勝を受けた中堅戦の青木は開始早々にコテで一本。続けざまにメンを決めて怒濤の勢いで日本一を達成した（写真は二本目のメン）



決勝
【次鋒】石川（東洋水産・本社）メー 諸江（日通商事・本社）
 ▲先鋒・庄司の快勝を受けた石川は近間の打ち合いからコテで先制する（写真）。その後は中間からのひきメンを追加し、優勝へ王手をかけた

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
東洋水産 (本社)	メー	庄 司	石 川	青 木	久 木	下 川	3
	メー	×	×	×	×	×	6
日通商事 (本社)	メー	中 野	諸 江	大 野	只 野	丸 山	2
	メー	×	×	×	×	×	1

「今までは優勝まであと一歩というところでもいつも逃してきて、ウチに勝ったチームがすべて優勝していることもあつて、今日は『ここで獲らねば』という思いがありました。チーム一丸となつて戦ってくれたおかげです」
 東洋水産と優勝を争つたのは、日通商事（本社）である。突出した戦績を持つ選手こそいないものの、穴のない戦いぶりを見せる同チームは第50回大会（平成19年）にはこの大会で優勝に輝いたこともある強豪である。誰かが落とせば誰かが取り返す、といった粘り強さは今大会で



準決勝
【先鋒】中野（日通商事・本社）メー 若松（NTT東日本・東京）

チーム	順	先	次	中	副	大	得点
日通商事 (本社)	メー	中 野	諸 江	大 野	只 野	丸 山	2
	メー	×	×	×	×	×	6
NTT東日本 (東京)	メー	若 松	竹 越	梅 岡	山 本	山 本	2
	メー	×	×	×	×	×	5

▲思い切った技を見せる中野が若松の手元の浮きをコテに打ち取ると（写真）、その後はメンを追加して二本勝ち。日通商事は次鋒戦も奪ったが、ここからNTTも実力発揮。大将戦まで大接戦を繰り返したが、NTTは反則の一本に泣いた

も健在。勝負がもつれば日通商事の2度目の日本一もあるかと思われたが、東洋水産・森久監督が「前半勝負だと思つていた」と語るとおり、若手選手で固めた東洋水産の前衛陣が奮起、先鋒からの三連勝で一気に寄り切つた。
 今年、東洋水産陣営はある強い思いを抱き、戦いに臨んでいた。ひとつはチーム最年長・副将を務めた久木原裕二の決意。森久監督は語る。
 「メンバーも入れ替わつた中で、久木原は36歳になりますが、今回、彼が、もう今年が最後、という気持ちでチームをまとめてくれたことが良い結果につながつ

6回戦◆東芝テック(本社) 2代X1三井住友海上(本店)
〔大将〕澤野メキ(○) 小田口



▲関東覇者の三井住友海上に東芝テックが食らいつく。中堅戦を終えた時点で三井住友海上が本数差一本でリードするも、東芝テックは副将戦を勝利して逆転。大将戦、小田口が一本奪うが、澤野も小田口が潜った機会にメンを合わせて同点に(写真)。東芝テックが金星を挙げる

6回戦◆日本通運(本社) 1代X1アートコーポレーション(本社)
〔大将〕中石(○) 杉田



▲副将戦で喫した黒星を挽回すべく、中石が奮闘。大将戦の初太刀、鮮やかなコテを決めて代表戦に望みをつないだ写真。再び大将同士が相まみえた代表戦は杉田の奮闘も光ったが、中石がコテ、メンと力強く渡って勝利を挙げた

6回戦◆伊田テクノス(本社) 2代X2三井住友銀行(本店)
〔代表〕橋本(○) 鈴木



▲先鋒を伊田が奪えば次鋒を三井住友銀行が、という具合に、取って取られての攻防の末に代表戦となった。大将同士の代表戦は橋本が勝利(写真は攻防)。惜しくも敗れた三井住友銀行だが20代半ばの若手で揃えたチームは、今後が楽しみな戦いぶりを見せた

5回戦◆パナソニック電気(本社) 3X0大塚家具(本社)
〔先鋒〕大亀(○) 三本



▲試合開始から怒濤の攻めを見せる大亀がコテで先制(写真)。さらに打ち合いからのコテ技で審判員の旗を一本上げさせると、続けざま近い間合からのコテを追加して圧倒。次鋒も一本勝ちしたパナソニックは、その後は大塚家具の反撃を許さなかった

5回戦◆NTT東日本(東京) 3X0凸版印刷(板橋)
〔中堅〕岡(○) 斎藤



▲前2人を引き分ける接戦も、中堅戦で岡が重みのあるひき下りで勝利を挙げる(写真)。NTTが副将・大将も連勝した。岡、副将・梅山の全日本選手権出場経験者、今年度の全日本選手権へ出場を決めている大将・山本らがその経験値を存分に発揮した

5回戦◆九州電力(本店) 1代X1日本通運(東京航空支店)
〔代表〕立花(○) 志賀



▲日通商事が先鋒を、九州電力が中堅を奪って代表戦へ。代表戦は引き分けに終わった大将戦の再現。志賀が果敢に攻めかかるが、立花は相手の動きをよく見ている様子。と、立花が渾身の諸手ヅキで志賀を攻めるや、切れ味鋭いコテを打ち込んだ(写真)

5回戦◆ALSOK(西東京) 0代X0富士ゼロックス(東京)(城西)
〔代表〕谷中(○) 吉田



▲先鋒から大将までが引き分けとなり大将戦へ持ち込まれた。ALSOKからは先鋒の谷中が、富士ゼロックス東京は大将の吉田が出陣。勝負はさほどの時間を要せずに決着。伸びのあるメン技で攻め立てた谷中がコテに転じればこれが鮮やかに決まった(写真)

5回戦◆NTT-XO大同特殊鋼(本社)
〔中堅〕下村(○) 木村



▲大同特殊鋼が豪強NTTに対して前2人を引き分ける奮闘を見せる。両軍ともに先にポイント奪いたいところだが、中堅戦は下村がメンで先制。木村もコテ技で惜しいところをとらえるが、攻め気にはやって出たところを下村が後方にさばきつつメンで打ち取った(写真)

3回戦◆NTT東日本(東京) 1代X1東洋水産(品川)
〔代表〕山本(○) 前村

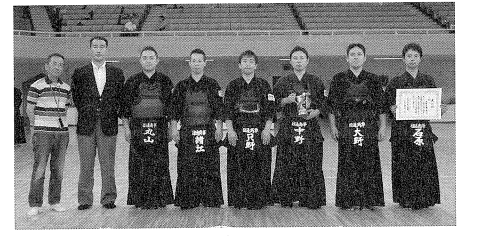
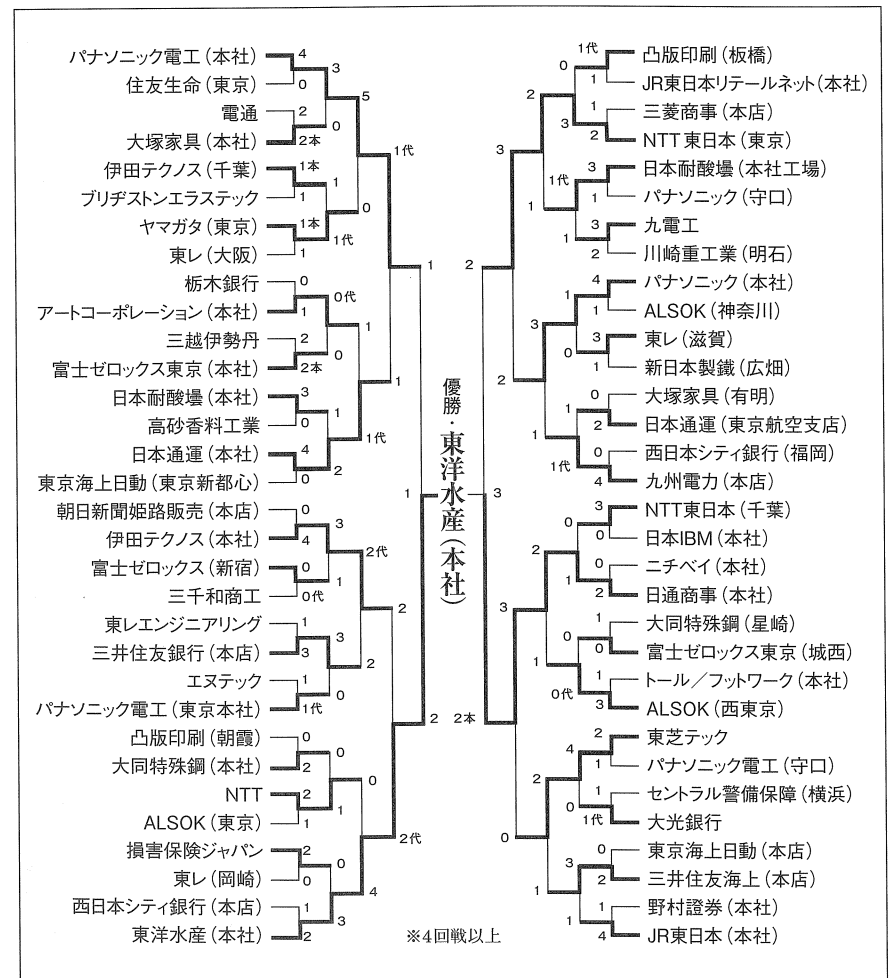


▲強豪チーム同士の戦いは両軍譲らず代表戦へと突入。東洋水産が中堅の山本を起用すれば、NTTは大黒柱の山本が代表戦へと臨んだ。前村の上段からの技もキレがあったが、山本もその技を巧みに見切り、最後はクンとコテに伸びれば、これが見事な本となった(写真)

5回戦◆三井住友海上(本店) 3X1JR東日本(本社)
〔先鋒〕鈴木(○) 渡邊



▲前回大会2位のJR東日本が難敵を迎えた。鈴木に劣らぬ長身の渡邊が攻め懸かるも、力強いメンを打ち込まれて先制を許す。その後、一本奪って勢いづいた鈴木が相メン勝負も制する(写真)。中堅戦も奪った三井住友海上は副将戦で黒星を喫するが大将小田口が勝ち、事なきを得た



2位◆日通商事(本社)
 選手=中野真広、諸江智也、大野進、只野裕樹、丸山彰一、石原健太。監督=高橋浩司



3位◆パナソニック電気(本社)
 選手=大亀健太、植田桂介、滝崎亮一、吉井祐二、勝見健太、吉村信人。監督=酒井順也



3位◆NTT東日本(東京)
 選手=若松守、竹越充、岡晋輔、梅山義隆、山本有樹、下宮一晃。監督=谷裕二

いふ条件はあまりにも過酷すぎたか。一本は速く、パナソニック電気の連覇への夢は途絶えた。

もう一方の3位、NTT東日本は、前衛を若手選手が務め、中堅以降を岡、梅山、山本のベテランが固める非常にバランスのよいチーム。層の厚い同社においては、いわゆるBチーム的存在となるそうだが、若手が思い切りよく戦い、勝負がもつれば後衛が競り勝ち、という勝利のセオリーが確立されており、最後の日通商事(本社)戦も勝敗の行方が最後まで読めない大会屈指の好勝負となった。また、この日チームの守護神の活躍を見せた大将・山本は東京都代表として今年の全日本選手権大会への出場を決めている。中堅の岡、副将の梅山も過去に同大会への出場を経験しており、チームに3人も全日本経験者を擁するとは何とも豪華なメンバーである。この日の戦いを見る限り好調ぶりが見て取れた山本。来たる全日本選手権での活躍も期待したい。

その他、優勝候補の戦いぶりに目を向ければ、三井住友海上(本店)は、今年度は関東大会を制したこともあり、その注目度は高かったが、6回戦で東芝テックの前に惜敗を喫して入賞はならなかった。競った勝負にめっぽう強い伊田テクノス(本社)はベスト8にまで漕ぎ着けたものの、東洋水産に代表戦の末に敗退。代表戦は水入りが入るほどの死闘となったが、ここは下川の執念が上回った。